

## 門井慶喜レクチャー～モノを語るということ～

平成 24 年 5 月 19 日

### 1. はじめに……好きな作家について語る時に僕の語ること

「好きな作家について語る」というのは、少なくとも僕にとっては、たいへん難しい行為なんじゃないかと思います。そこには読者の主観という日頃から信じるにたるべき根拠のないものに加え、個人的な思い入れといった、最早作家そのものの文章から完全に独立してしまった、いわば別のものが合わさっていることが前提として存在しているからです。

そういう状態に置かれた人間が「レクチャー」とまで題された場所で語ろうとするので、そこから、どこかにおかしな点や、不思議に思う点が出てくることは間違いありません。そういうときはどうか、優しく「一寸、奇妙でせう」と指摘していただけると、発表者としては心が救われる思いです。では何卒、よろしくお願いします。

### 2. 門井慶喜の来歴……ぼくたちの、先輩なんです。

1971 年、群馬に生まれ、栃木の宇都宮で育つ。門井慶喜は本名。1994 年、同志社大学文学部文化学科文化史専攻（現在の文学部文化史学科にあたる）卒業（OB ですよ）。

「豊富な知識を縦系に、物語を横系にして巧みに独自のミステリを織り上げる気鋭」

（東京創元社 HP 著者紹介より）

いつからか大学を出たら作家になるものだと信じ込んでいたという。当時はまだ小説を書いたこともなく、その根拠は不明。大学四年生になっても就職活動もせず読書を楽しむ。

もちろん小説を書いていない以上、作家デビューならず。卒業後、宇都宮に戻り、就職。しかし、作家になるという確信はそのまま抱き続け、二十五歳のころ、小説を書かねば、書いて賞に応募せねば、と考える。

創元推理短編賞（現在のミステリーズ！新人賞にあたる）、オール讀物推理小説新人賞、日本ファンタジーノベル大賞などへの投稿を行なうようになる。2003 年、「キッドナップーズ」で第 4 2 回オール讀物推理小説新人賞受賞。同賞出身で、ミス研的におなじみの作家といえば西村京太郎、宮部みゆきなどが挙がる。また、同年のオール讀物新人賞のほうにも最終候補として「エルミタージュへようこそ」が残っている。

2001 年の時点でオール讀物推理小説新人賞の最終候補に残っており（泉慶一「女子校時代ライブラリー」。「天才たちの値段」の原型らしい）、その半年後には会社員を辞めている。

2003 年の受賞後、京都に移り住む。現在は大阪在住か。

「いざ作家になるということ考えた際、学生時代に過ごした京都が、自分にとって最適の場所だと思ったんです」

### 3. 門井慶喜の読書歴……『時の娘』読もうぞ！

最初に絵本以外で読んだ本は「国語辞典」。

少年時代はホームズ、その後ポーを体験。「黒猫」は衝撃的だったとのこと。

二十歳少し前からバルザックなどの海外文学を読み始める。そのころ好きだったのはイタロ・カルヴィーノなどで、そこから海外ミステリにも手を伸ばす。ディック・フランシス、クレイグ・ライス、P・D ジェイムズなど。最近（2008年インタビュー当時）はR・D・ウィングフィールドなど。何度も読んだ作品は歴史もので、ジョセフィン・ティ『時の娘』。国内では宮部みゆき『理由』がもっとも気に入った作品。短篇では「我らが隣人の犯罪」投稿当時は研究をしていたが、それでも毎回面白く感じる作品。

「意識的にこの人のような小説を書きたいな、と思ったのはデイヴィッド・ロッジですね。それからイタロ・カルヴィーノ。…日本人では森鷗外が僕の神様。」

#### 4. 作風&著作一覧

いわゆる芸術・美術を題材としたミステリーで単行本デビューしたが、新人賞受賞作「キッドナッパーズ」は少年誘拐という犯罪を扱ったもの。さらに現在は歴史小説を手がけていたり、ミステリというジャンルにとどまらない活躍を見せ始めている。一般読者の考えるであろう「門井慶喜らしさ」というものを簡単に一言で済ませてしまうのは誤りと考えたほうがいいのでは。これに関しては後述する。

#### 美術探偵 神永美有シリーズ

『天才たちの値段』文藝春秋 2006年（2010年文庫化）

『天才までの距離』文藝春秋 2009年

#### N市シリーズ（？）

『おさがしの本は』光文社 2009年（2011年文庫化）

『小説あります』光文社 2011年

#### ノンシリーズ

『人形の部屋』東京創元社 2007年

『パラドックス実践 雄弁学園の教師たち』講談社 2008年

『<sup>ベディグリー</sup>血統』文藝春秋 2010年（連載時の「血統証明」を改題）

『この世にひとつの本』東京創元社 2011年

『竹島』実業之日本社 2012年6月刊行予定

#### 未単行本化・連載中作品

『キュレーターズ・ルーム』小学館「本の窓」連載。完結？

『若桜鉄道うぐいす駅』徳間書店「読楽」（旧「問題小説」）。完結。

『かまさん』祥伝社「小説 NON」連載中。

『シュンスケ!』角川書店「デジタル野性時代」連載中。

## 5. 課題本①『天才たちの値段』

「受賞してから単行本が出るまでのあいだに、自分の姿勢が決まったことが——つまり、美術というか、大きくいうと歴史、それと取り組んでいくと決意したことが[「キッドナップーズ」を]収録しなかった理由です」

神永美有シリーズ第一作。鑑定眼ならぬ鑑定舌を持つ天才・神永美有（ホームズ役）と美術講師の佐々木昭友（ワトスン役）のコンビが送る、美術品と、人とを巡るミステリ。今作で出て大きな題材としては、ポッティチェリ、大航海時代の海図、江戸時代の涅槃図、フェルメール、正倉院御物と美術関係に疎い人間が見ても「なんだかすごそうだな」と思わせる面々。作品の説明も比較的難解にならないように（作品の来歴や、その歴史的断面をある程度描写）しているあたり、読者に対して気を配っていることがうかがわれる。また連載作品であるためか、特徴的な登場人物を用意して読者を引きつけておいたり、単行本デビュー作ながら推理小説としての面白みと美術の深さ、天才との付き合いというストーリーなど、全体の均整がとれた連作短編集となっている。

◆各短篇、解題。——例会で一緒に語ろう・考えよう！ たぶんネタバレ回避するよ！

「天才たちの値段」……ポッティチェリ『秋』

- ・美術ミステリといえばやっぱり真贋論争ですよ。
- ・「ここなんです」と、泰平の逸民、神永美有初登場。
- ・イヴォンヌ＝高野さくらも初登場。

「紙の上の島」……モラエスのくれた海図

- ・イヴォンヌ姉の登場に、揺れる佐々木くんの心。
- ・「今夜のビール、ずいぶん甘かったなあ」しれっと言う神永。
- ・歴史への解釈の在り方。物を語るから、人を語るへ。

「早朝ねはん」……奇妙な涅槃図

- ・「お釈迦様がエアロビクスを。」の開始一行のインパクト。
- ・「肉食撲滅キャンペーン0」
- ・解決編のアレが某裁判ゲームみたいで個人的には好きです。

「論点はフェルメール」……フェルメールの贋作

- ・「両雄ならび立たず」

- ・贋作より真作が上であることを証明せよ→パラドックス実践？

「遺言の色」……正倉院御物

- ・「死者からの試験問題」。割とこの形式は目にしますよね。
- ・清水くん再登場。
- ・「彼への依存を脱せられない」。「値段」のときの天才への凡人がとるべき態度は「賞賛」。

続編『天才までの距離』の話をして、次の課題本へ。ここいらで小休止でも。

## 6. 課題本②『おさがしの本は』

N市シリーズ(?)第一作。『小説あります』との関係は「姉妹編」と言っていますが、時間軸が違いますし、作中には『おさがしの本は』の大まかなストーリー、和久山くんのその後の近況も書いてありますし。はぐらかさず、具体的に伝えてください。ちなみに両方とも凝った装丁になっており、帯は図書館の分類シールのようなデザイン（出版社を越えた通し番号入り！）があったり、カバー下は別のデザインになっていたりする。

図書館のレファレンス・カウンターを担当する主人公のもとにやってくる「〇〇という本はありませんか」という質問。書店員経験者や図書館司書課程を勉強している人間なら、これが一体どんなことになるのか、想像がつくだろうし、覚えがあるはず。訳の分からない本や、見当違いの質問に悩ませるわけで。かくして本探し小説の顔が見えてくるのだが、そこに暗雲が、財政難からの図書館廃止の話が浮き上がる。エンタメ寄り。

### ◆各短篇、解題。——例会で一緒に語ろう・考えよう！

「図書館ではお静かに」

- ・シンリン太郎→森林太郎＝森鷗外の『日本文学史』
- ・問題の本は国立国会図書館サーチを駆使すれば近代デジタルライブラリーで参照することも出来ます。かがくのちからってすげー。<http://iss.ndl.go.jp/>

「赤い富士山」

- ・赤富士だけど、赤富士じゃないという解答。
- ・人の記憶の曖昧さ。
- ・解答と、赤富士がどうつながっているかという見方。

「図書館滅ぶべし」

- ・問の用意の仕方が秀逸。今作品中の白眉。  
A 意味的には、日本語における外来語の輸入の歴史をまるごと含む。

B 音声的には、人間の子供が最初に発する音によってのみ構成される。

- ・「失礼、和久山君」の憎めない感じ。

「ハヤカワの本」

- ・ Not 早川書房、but 早川図書。
- ・ レファレンス・カウンターという場所に居るからこそ、気付かない点。
  - ・ 単なる本探し=検索ではない。
  - ・ 「本」というものが何なのか、という現代における盲点。

「最後の仕事」

- ・ 登場人物たちの台詞が楽しい。
- ・ 武田泰淳「異形の者」は2011年現在、ネットでも読めます。  
日本ペンクラブ 電子文藝館編集室にて。

<http://www.japanpen.or.jp/e-bungeikan/late/takedataijun.html>

- ・ 「勉強家！」
  - 「…どうも自分はいま、褒められたのではないらしいと感じはじめています。」
- ・ 「座らなければ、君は餓死する」「N市の条例の附則を知らんのか」
- ・ 最後の仕事……中国の故事みたいな話のオトし方っていいですね。

全体的にミステリミステリというよりは、エンタメ寄りの作品傾向であることは先ほども述べたが、この作品で見ておくべきところは、あくまで図書館のレファレンス・カウンターの仕事という立脚地から全くブレていないという点に尽きる。それでいながらバリエーションに富んだ謎を用意していながら、それぞれ納得のいく結末を用意しているところは、いわゆる「論理のアクロバティックさ」の少ない、地味な作品だと評してしまうのは正直勿体ないと言えるのではないか。再読することでその精緻さを確かめていただきたい。

7. 門井慶喜について語るときに語らなくてはいけないこと。

◆門井慶喜にとってのミステリとは

「謎と謎解きがあって、それが一篇の主體的な関心になっている小説」

門井慶喜という作家を読むとき、ミステリ、つまり上記のように謎というものを扱う小

説というものについて、もう少し考える必要があるのではないかと思うのです。

たとえばここに鉛筆がある。手が汚れないように芯の周りを木材が被っている。どうしてこうなっているのかと考えてみる。おそらくだけれど、鉛筆というものが初めて出来たときは、周りの木材は存在しなかったのではないかと考えることはできる。それは利便性の問題を含む様々な事情があるわけだけれど、実際鉛筆を見たときにはそんなものを感じることはないですね。そういうことを普段生活しているなかではまず考えないけれど、小説として「モノを語る」ならば、そういった部分に目をやることができたりする。門井慶喜の小説にはどこかそういった、「文化」への態度を改めるものが多いように思えます。それはコウショーな美術品であれ、卓上にあるちょっとしたものでも変わらないのでは、とも思います。

さらに言えば「モノを語る」という行為をするさいに、絶対に欠かせないものがありますよね。そうです。「ヒトを語る」という行為です。モノがあつてヒトが出来たり、ヒトがあつてモノが出来たり、と文化形成は割と複雑な過程を通ってきたわけなんです。実は結構あべこべだったりします。門井の小説にもそういった話はちょくちょく出てきますよね。

で、このあべこべ。実は推理小説そのものですよ。わざわざ整理に必要な情報が最初から出てこないし、順序はバラバラ。でもそれを一から順に、しっかりと「積み上げ」ていく。謎を解いていく。そういう行為を描くことが推理小説であるならば、門井慶喜は推理小説家だと思ひ、そういう目線を門井慶喜は、少なからず持っていると思うのです。

とりあえず、レクチャーで僕が言いたいことはそのくらいです。

#### 〈主要参考文献〉

講談社ノベルス 門井慶喜特別インタビュー

<http://www.bookclub.kodansha.co.jp/kodansha-novels/0906/>

同志社大学 キャンパス整備事業 卒業生メッセージ：門井慶喜さん

<http://www.doshisha.ac.jp/granddesign/prologue/message07.html>

直木賞のすべて 付録オール讀物新人賞受賞作候補作一覧

[http://homepage1.nifty.com/naokiaward/kenkyu/furok\\_ALLYOMIMONOaward.htm](http://homepage1.nifty.com/naokiaward/kenkyu/furok_ALLYOMIMONOaward.htm)

直木賞のすべて 付録オール讀物推理小説新人賞候補作一覧

[http://homepage1.nifty.com/naokiaward/kenkyu/furok\\_ALLYOMIMONOSUIRIaward.htm](http://homepage1.nifty.com/naokiaward/kenkyu/furok_ALLYOMIMONOSUIRIaward.htm)

『ミステリマガジン 2008年2月号』早川書房